

## 特定質問 (コメント)

入不二基義 (青山学院大学)

### ◎ 斎藤慶典「瞬間と偶然、あるいは時間と実在」

0. 【基本スタンス】 斎藤の論考に基本的に賛同。その上で、斎藤は「白である」と言うが、実は「黒でもある」という方向のコメントを加えたい。すなわち、「白と黒」の「二重性」「反転」を強調する。

#### 1. 【偶然と必然】

・ 瞬間の生起を「原始偶然」として語るとき、斎藤はいつさいの必然性を排除する。たしかに、瞬間の生起は、(それによって開かれる) 世界内的な必然性(原因・理由)を持たない。しかし、「原始偶然」には別種の「必然性」が重なる。その別種の「必然性」とは、斎藤の表現で言えば「(現出の) 絶対性」「(程度を持たない) いかんともし難さ」に相当する。私はこの必然性を、「現に成り立っていること自体の不可避性・絶対性」なので、「現実的必然」と呼ぶ。つまり、「原始偶然」は「現実的必然」でもある。この点では、九鬼の「絶対的形而上的必然と原始偶然とは一者の両面」を思い起こすべきである。

・ 「原始偶然」と「現実的必然」は反転する。「このよう」であれ「あのよう」であれ、とにかく現にあることが「必然」→その「必然的な現実」自体がそもそも「現出しない」という別様がありえた(原始偶然)→その「偶然的な現実」自体がとにかく現れていなければならない(現実的必然)→・・・。

#### 2. 【現れと実在】

・ 同様の「二重性」「反転」は、「現れ」と「それを超出するもの」との間にもある。  
・ まず、「(Pであることに) ふと気づく」という離脱と、その離脱元(P)とは、先行性・優先性において反転。「離脱の先行性」→「離脱元の先行性」→「離脱元の先行性自体が離脱においてこそ現れる」。

・ さらに、この反転は高次化して反復される。「現れの根源性」→「現れの全面的な受動性(=実在の抵抗)」。どちらか一方の項ではなく、両者の反転関係が根底的。

・ 最初の「離脱元の先行性」は通常(独立自存化する)状態や過去のことであり、高次の「実在の抵抗」は、われわれから無関係・独立の力である。両者は次元を異にするが、ともに反転関係において同じ側の働きをする。「実在」という表現には「厚み」があつて、両者の水準の「脱・現れ」性が重なっている(客観的・対象的「実在」~力としての「実在」)。

#### 3. 【現実と実在】

・ 斎藤は、「現実」という表現を世界内状態(あのよう・このよう)の水準に当て、「実在」という表現を(状態に関係なく)現に現出していること自体の水準に当てている。

・ しかし、「現に」という副詞や、偶然性・必然性・可能性との様相つながりを考慮すると、斎藤が提示する「実在」は、「現実(性)」とも呼べる。あるいは、「現実(性)」とは、「状態(内容)」の水準と「実在」の水準の両方を含む「厚み」があると言ってもよい。

「実在」という表現にも、同様の「厚み」がある（先述）。

・ 斎藤の言う「実在」の水準においてもなお、「接触ならざる接触」「拒絶」等の表現にかいま見られるように、「実在」には、「時（瞬間の生起）」に対する外部性・疎隔性が残る。ならば、「時は実在する」「時は実在である」と言うよりも、「時は実在に跳ね返される」、（その意味で）「時は非-実在する」と言うほうが正確ではないか。

#### 4. 【全体と部分】

・ 斎藤は、「それぞれの「瞬間」は互いに独立であり・・・」（傍点は入不二）と語る。

・ しかし、「それぞれ」「互いに」「そのつど」「そのたびごとに」とは、俯瞰された複数性であり、その複数性は、「一つの「瞬間」の内にすべてが含まれるような在り方」「一回しかない」等で表現される「瞬間の一回性・全体性・一挙性」と相容れない。「瞬間」を「それぞれ」という仕方で俯瞰することなど、本当はできない。

・ にもかかわらず、このように語れるのは、「二重性」「反転」による。つまり、「瞬間」は、「全体」を開くと同時にその中の「一部分」にもなり、その両者であることを反復する。このような「俯瞰しえないものとりあえずの俯瞰」という二重性の反復が、語ること（ことば）そのものである。

#### 5. 【未来】

・ 斎藤と小林の論考は、「未来」の扱いにおいて異なっている。斎藤は、連続的な時間（状態）の中に位置づけられるものとしての「未来」にのみ言及する。一方、小林はそうではない「未来（未知の未来）」への飛躍こそを重視する。

・ 斎藤は「未来」の片面しか扱わないが、「未来」も（「いま・現在」と同様に）二重化を被る。すなわち、「瞬間」「いま」によって開かれた時間の内に位置づけられる「未来」と、「瞬間」「いま」と断絶する「未来」との二重性である。

### ◎ 小林敏明「偶然性の時間論 ―九鬼から西田へ」

0. 【基本スタンス】 断絶的な「未来」への飛躍を重視する点、その「未来性」を「他者性」に繋げる点に関して賛同。しかし、その「未来性」「他者性」の強度がまだ十分ではないというコメントを加えたい。

#### 1. 【未来の「未知性」】

・ 「未知数」「未だ知られていない」等の表現からも分かるように、「未知性」とは、「知られてはいないが何かがあること」「いずれは知られうること」を含意してしまう。つまり、「未知性」は認識論的な否定ではあっても、存在論的な否定ではない。

・ しかし、他性として焦点化すべき「未来」とは、「あるけれども知られない」「まだ知られないという仕方であるもの」ではなく、そもそももっと強い意味で「ない」のではないか。すなわち、「未知性」ではなく、「不知性」「非知性」ではないか。

・ 「未来」とは、「現在の心の状態」や「その内容」ではない（予期される未来は未来ではない）が、その時になって「知られること」でもない（実現された未来は未来ではない）。

その時になって「知られること」は、その時における「現在のこと」だからである。このどちらでもないという点にこそ、「未来」の「なさ」のポイントがある。つまり「未来」は、どんな仕方でも「ない」のでなければならず、何らかの仕方でも「ある」と把握されたときに当の「未来」ではなくなってしまうということを、その本質とする。そのような「無としての未来」は、「未知」なのではなく、「不知」「非知」なのである。

## 2. 【汝＝他者との遭遇】

- ・ 小林のように未来を「未知性」として考えると、他者を「(飛躍を介して) 出会うもの」と捉えることになる。小林は、「他なるものへの直接の遭遇」「絶対的他」たる他者に直接遭遇し、それを受け入れる」「未知」を孕んだ未来との遭遇について語る。
- ・ しかし、「遭遇」可能な他者では、「他者性」が十分ではないと思う。「他性」の強度を上げるためには、「遭遇」ではなく、せめて「遭遇ならざる遭遇」(斎藤)でなくてはならない。換言すれば、絶対的な他者への遭遇とは、未来が「不知」「非知」であるのと同様に、「不可能性への直面」でなくてはならない。
- ・ 西田からの引用文中に「絶対に他なるものとは考えることのできないものである、而もそれが私をして私たらしめているものである」(傍点は入不二)とある。この「できなさ」は、「遭遇」も「受け入れ」もできないという水準での不可能性であると思われる。
- ・ したがって、「汝」は、その遭遇不可能性という他性によってのみ、「私」を限定するのであって、「直接の遭遇」によるのではない。「汝」は、「私」の底において、「私自身」の絶対的否定としてのみ生じるというのは、そういうことではないだろうか。「汝」は、「出会う一事象」ではないのである。

## 3. 【精神病理】

- ・ 小林は、「偶然への賭け」と「いきなり」の精神病理の差異を、「さきがわからないにもかかわらず、享楽を見いだす」と「さきがわからないがゆえに、苦痛を感ずる」の違いとして見ている。あるいは小林は、「偶然性の精神病理」(木村)を、「不安を伴った賭け事の様相」「遊ぶ」ことが不可能となってしまった人間の悲劇」として記述する。
- ・ しかし、「未来性」「他者性」の強度を上げる私の観点からすると、事態は少々違って見える。すなわち、偶然への賭けを楽しめる(遊べる)ことは、「未知性・新たな遭遇」(＝弱い未来性・他者性)に属するが、精神病理的な苦痛や遊びの不可能性の方は、「不知性(非知性)・絶対的な他性」(＝強い未来性・他者性)を示唆するように思われる。両者は、同じ「偶然」「未来」に違った仕方でも直面しているのではなく、そもそも異種の「偶然」「未来」に直面しているように見える。

## ◎ 木村敏「クレーゼの病理」

### 1. 【斎藤⇔木村の対照より】

- ・ reality / actuality の問題
- ・ 斎藤における「現実性／実在」の使用は、木村における「reality / actuality」の対(差

異) と比べると、むしろ「逆転」している。斎藤の場合、「現実性」は「現出後の世界の状態 (このよう・あのよう)」について言われるのに対して、「実在」は「世界の現出自体」に関わる。一方、木村の場合には、**reality** (実在) の方が「対象化された客観世界」に関わり、**actuality** (現実性) はその手前の「非対象的で直接的な現在の体験・実感」のほうを表す。斎藤の場合は「実在」の方が根源的な役割を担い、木村の場合は「現実性(**actuality**)」の方が根源的な役割を担っている。

- ・ さらに斎藤の場合には、英語の語彙としては”**real**”, “**reality**”のみが使用されており (**unreality, a-reality, \*irreal, \*areal** を含む)、それに「現実的」「現実性」(非現実性、非-現実性、非現実的、非-現実的) という訳語が与えられている。すなわち、「実在」には対応する英語の語彙は使用されていない。とはいえ、斎藤の言う「実在」は、木村の言う **actuality** とも違うだろう。

- ・ さらに木村の場合には、**reality / actuality** に加えて、もう一つ **virtuality** が加わる。
- ・ これらの「逆転」あるいは「ずれ」は、はたして何を意味するのだろうか？

## 2. 【小林⇔木村の対照より】

- ・ 小林の「未来の未知性」「未知への飛躍」と、木村(『偶然性の精神病理』)の「不可知の第一次元」「その不可知性を突破してわれわれの意識へ出現してきた最初の閃きのようなもの」。この「未知」と「不可知」とは、同じなのだろうか異なるのだろうか。

- ・ 木村(『偶然性の精神病理』)の場合には、「時間の発生(時間が流れる・動き出す)」を、「永遠の現在」という全一的な次元自体にではなく、その次元と意識の接触に見だそうとしている。一方、西田=小林の場合には、「永遠の現在の自己限定」自体に、表象化される以前の「時間の初発・原初」を見ようとしているように思われる。「永遠の現在の自己限定」(現在が現在を限定する)と「全一的次元と個人的意識の次元との接触」とは、同じなのだろうか異なるのだろうか。

- ・ 木村(『偶然性の精神病理』)の場合には、「生き生きとした時間」のもたらす「必然性の感覚」が失われること(偶然性の支配)が、「病理」である。一方、小林の所論においては、「偶然性」「飛躍」こそが「生き生きとした時間」へとつながり、「必然性の感覚」はむしろ「頹落した連続的な時間表象」とつながることにならないか。

## 3. その他

- ・ 「クラーゼの病理」における「飛躍の感覚」や「高揚感」等の眼目(焦点)は、「非連続」「断絶」自体にあるのか、それとも「(回復後の)新たな秩序」の方にあるのか。「帰無」と「創造」という点では、表裏一体とも言えるが、「新たな秩序」が「秩序」であるかぎりには、「非連続」「断絶」を隠蔽し消し去るようにも働くのではないか。

- ・ テンスとアスペクトとの関係について。